住まいや生活の相談ができるカフェをオープン

支える現場を訪ねて　79

特定非営利活動法人「楽」理事長
小規模多機能型居宅介護事業所「ひつじ雲」
認知症デイサービス「くじら雲」
柴田範子

特定非営利活動法人「楽」は、昨年から国と高齢者住宅財団が進めている「地域善隣事業」の取り組みを受託しています。同事業は、低所得の高齢者等への住まい・生活支援を行う取り組みを推進するものです。実際に市と共にスタートしたのは秋からでした。地域の方々の理解を得るのは難しいなとしみじみ思ったものでした。

住まいに困っている人は、低所得層や生活保護を受給している方限定と受け取られてしまうようで、説明の難しさを何度も経験しました。小規模多機能型居宅介護事業と地域活動を中心に行っている法人ですから、住まいについては全くの素人。でも、地域に住まいで困っている方はいるはずという思いを持ちつつ、昨年末とこの春にも地域包括支援センターや病院回りをしました。

保証人がいないために、転居することさえできない方がおられ、3件の相談がありました。ようやく先日、私が居住支援制度の緊急連絡人となり転居できた方がいます。当法人の職員と共に、目標到達までかなり高い壁がありました。再度、地域包括支援センターや病院、あるいは、町内会などを回り広報の必要性を感じているところです。

地域の方に私たちの取り組みを知ってもらうことと、住まいの相談や生活支援の場を作った方が良いと思い、市の担当者と相談しました。数カ月かかって、小規模多機能「ひつじ雲」の近くに古い倉庫を借りられることになり、業者さんに私達にはできない最低限の改修工事を依頼し、職員たちが暑い最中、汚れた壁などにペンキを塗り、頑張ってくれました。

手作りで、だれでも気軽に集える場所を作った

完成度が高いとは言えませんが、温かみのある場ができました。これから少しずつ、気になるところを塗り直したり手を加えることになりますが、地域の方の身近な場所にしたいという思いを込め、「ひつじｃａｆｅ」を7月に開所しました。8月からは少しずつプログラムも組み込み、ひつじｃａｆｅに地域の方々が足を運ぶ機会が増えるようにしたいと思っています。

先日、できたばかりのひつじｃａｆｅで運営推進会議を開催しました。利用者さんのご家族、地域の方々、民生委員、行政担当とひつじ雲の職員数人の計17人の参加で行われました。ひつじｃａｆｅは、地域善隣事業の一環であることを説明し、さらに一事項を提案しました。

何年経過してもひつじ雲の利用者はなかなか増えません。それによって、運営は厳しいところを行ったり来たりなのです。

「ひつじ雲はどこにあるの？」を最初の問いにして「ひつじ雲は幸町4丁目の、以前コンビニだったところにあります」と読み、「この説明に、この商店街の名称を入れなくてもいいでしょうか？」と問いかけました。かつて、その商店街はとても賑わっていて、結婚したての頃は買い物するのに「あれ下さい」と言えずに苦労したものと、昔話に花が咲きます。「商店街でほとんどが揃ったからね。私の母は、八百屋さんがあまりに忙しいから、店で使う紙袋を新聞紙で作って、買った野菜を入れてあげていたわね」など、30～40年前の川崎駅前商店街の様子が浮かぶような会話が飛び交っていました。

「ひつじ雲が力を注いでいるところ」を挙げ、具体的な内容も書いてみました。ご家族から「こんな風に書いてもらえると具体的でわかりやすい。父の様子を浮かべながら読むと良く分かります。こんなのが必要ですね」、「沢山の内容があるので、ポスティングされた方は読まないのではないか」など、意見は様々でした。多くの人の意見をもらえることで修正・加筆につながります。

都会のど真ん中にある事業所ですが、地域との関係性はとても大切だということを、このような場で教えられるのです。地域の方々に心から感謝しています。